

走る感動の舞台で全ての視線に届く スポンサー各社の存在感!

設営物

イベントエリア
フォトスポットとしても活用

スタート地点



スタート台



スタートゲート



マラソン フィニッシュゲート



ハーフマラソン フィニッシュゲート



フィニッシュテープ



距離表示板



スポンサー看板



地域やランナーとつながり

共に未来へ進むスポンサーという

パートナー

大会を成功させる上で欠かすことのできない協賛企業の皆様。さまざまな形でサポートや応援をいただいた地元千葉の企業の方に、ちばアクアラインマラソンにスポンサーとして関わった感想や大会への思いをお聞きました。

01

オフィシャルスポンサー
安房運輸株式会社
代表取締役会長兼社長

石川 夕伎夫 さん

1943年（昭和18年）創業。
千葉県君津市を拠点に、流通をはじめ多角的に事業を展開。
南房総のさらなる発展を目指して走り続けている。

ご家族の不幸が続くなど、困難な状況のなか事業や地域への貢献に励んでこられた石川社長。大きな目標に向かって走るランナーの姿が重なりました。

地元・千葉の発展のために初協賛。 社名の入ったゼッケンは、社員の誇りに。

これまでも学校など、地元への社会貢献を何十年もやらせてもらってまして、大会の支援はその流れの一つですね。もともと大会の輸送を担っていましたが、2024年はオフィシャルスポンサーとして協賛することになりました。実際に協賛すると、前にも増して大変でしたね。輸送の不備でランナーや関係者の皆様にご迷惑をかけたりすることがないよう、事前の準備から当日まで気が抜けなくて。無事終わった時は、社員一同ホッとしましたよ。今回オフィシャルスポンサーになったことで、広告や当日の設営にも弊社のロゴや社名が入りました。県外から参加されたランナーも多く、大会の告知から当日のテレビ中継などを通して、千葉だけでなく全国にもPRができたと思います。中でもゼッケンにロゴが入ったのは誇らしかったですね。社員とその家族にも好評で、いろんな方に「見たよ!」と声をかけられたのが嬉しかったと聞いています。弊社からも20数名がランナーとして参加し、応援も含めて社内でも盛り上がり上がっていました。当日の業務に携わった社員も、現場で走り回ってましたしね（笑）。

ちばアクアラインマラソンで、 千葉から日本を明るく。

この業界は今、人材不足や燃料価格の高騰で正直大変な時期なんです。周りの方には、厳しい中マラソン大会の協賛なんてよくやるねと言われることもありましたが。でもこういうご時世だからこそ、協賛することに意味があると思うんです。みんなで楽しめるイベントがあると暗い雰囲気も明るくなりますし、それが次の活力になっていく。ちばアクアラインマラソンには、世の中を明るくする力があると思います。大会が続く限り、サポートしていきたいですね。



多彩なグループ会社と全国展開の強みを 最大限に活かして、大会を盛り上げる。

弊社は、ちばアクアラインマラソンの開催当初から協賛しています。大会前には出走権のプレゼントキャンペーンや、イオンモール幕張新都心で応援イベントを開催するなど、お客さまに楽しんでいただける企画を展開しました。当日は例年通り、会場に物販ブースを設けました。こちらではドリンクや食品をイオンのお店と変わらない価格でご提供し、毎年ご好評をいただいています。また、グループ会社のスポーツ用品店スポーツオーソリティ(現:メガスーツ)も出店し、スポーツ用品や補給食などの販売を行いました。スポーツオーソリティがイオングループだにご存知ない方もたくさんおられたので、グループ会社の認知にも非常に役立ちました。スポーツオーソリティをはじめ、イオングループではドラッグストア、リラクゼーションやスポーツクラブなど、健康にまつわる事業にも力を入れています。マラソン大会の参加者は健康への意識が高い方が多いので、そういった部門とも連携し、大会で得た経験やデータをグループ全体で活用できたら理想的ですね。全国展開していることもイオングループの強みなので、全国の店舗を巻き込んで大きな流れを作り、さらに大会を盛り上げたいです。大会の度に様々な発見があり、自社の可能性に気付かされることも多々あります。協賛は金銭面などでサポートするものだと思うがちですが、実は結構得るものも多いというのが実感です。

ランナーの要望に応えて、 会場のキャッシュレス化に挑戦。

プライベートでマラソン大会によく参加する社員から、会場で財布を出して買い物をするのが大変だと聞き、会場のキャッシュレス化に取組みました。イオンにはAEON Payというキャッシュレス決済サービスがあるので、それを活用してランナーさんのストレスを軽減できればと。当日は、「やっとかイオンさん!」とブースでスマホを出されるランナーさんもいて、キャッシュレス決済がマラソン大会で求められていることを実感しました。とはいえ初めての試みだったので、課題も出てきました。ただ、それも実際にやってみないと分からないこと。よりよいサービスを提供するための糧として、これから役立てていきます。そういった意味でも、たいへん実りの多い大会となりましたね。



02

オフィシャルスポンサー
イオンリテール株式会社

坂 勇人 さん

総合スーパー「イオン」や
「イオンスタイル」を展開する、
イオングループの中核企業。

2024年の大会を振り返るうちに
新しいアイデアが続々とあがり、
企画会議に発展。次回への期待が
高まりました。





代替不可能なデジタルデータ、NFTで大会の開催記念証と完走証明書を発行。たくさんのランナーの記念に。

オフィシャルスポンサー

株式会社千葉銀行

北澤 卓也 さん

1943年(昭和18年)の創立以来、千葉の発展を支え、地域の問題解決に貢献し、社会的価値を提供してきた地方銀行。



**大会とのコラボ企画で、
千葉観光のきっかけづくり。**



今回協賛するにあたり、千葉の地場産業を応援するちばぎん商店らしい取組をしたいと思い、「アクアライン“だけ”マラソン」という商品をクラウドファンディングを用いて販売支援いたしました。その名のとおり、アクアラインだけを走る出走権に、宿泊と会場までの送迎をセットにしたプランです。走る距離が短いので気軽に参加できますし、宿泊して千葉をゆっくり楽しんでほしいという思いもありました。ちばぎん商店のお客さまは関東の方が多いのですが、今回のプランは北海道などさまざまなエリアの方に購入していただきました。全国の方にアプローチできたのは、大会の知名度と魅力によるところが大きいと思います。今後は千葉の特産品を紹介するブースを充実させたり、出走権のバリエーションを増やしたいですね。ちばアクアラインマラソンと一緒に、これからも千葉の魅力を全国に発信していきたいです。

**ちばアクアラインマラソンを、
新しいサービスのきっかけに。**



今回、参加者の記念になるものと考えた時に、ちょうどWeb3.0の活用を進めていたこともあって、開催記念証・完走証明書をNFTで発行することになりました。NFTで発行すれば、新しいサービスへの活用も期待できますし、話題性もあります。どれぐらい取得していただけるかは未知数でしたが、蓋を開けてみるとランナーの方だけでも14,000件ほどありました。仕組みとしては、ランナーの方に大会の開催記念証のNFTを事前に取得していただき、それがマラソンを完走すると自動的に完走証明書に変わるというものでした。取得された方にお話を聞くと、デザインが良かったとか、集める楽しみができたとか好評でした。実験的な取組でしたが、実績を得たことで今後の展望を描けましたね。



ちばぎん商店株式会社

進藤 航旭 さん

2021年、千葉銀行の地域創生プロジェクトとして発足。千葉の名産品の販売や、千葉の事業者のクラウドファンディングを行う。



大会とのコラボ企画「アクアライン“だけ”マラソン」は、大会としても初の取組。好評だったため、今後もさらにブラッシュアップしていきたい。

04



子育て中のスタッフをサポートする託児所を本社に併設。保育士も正社員として雇用し、誰もが安定して働ける環境づくりを実践中。

オフィシャルスポンサー 日本賃貸保証株式会社 (JID) 黒米 うらら さん

JIDは1995年に日本初の賃貸保証業を立ち上げる。2025年、創業30周年を迎えるとともに、木更津港発展のため木更津駅西口に本社を移転する。



地域貢献の一環として初めて協賛。 PRと社員のモチベーションアップにも 嬉しい効果が。

Fight!



東京から木更津に本社を移転してから、地元の方を積極的に雇用したり、花火大会などへの協賛、医療従事者支援などを行ってきました。今回の協賛もその一環です。弊社は事業の内容上、どうしてもご利用者さま以外との接点が少ないので、今回の協賛が皆様に知っていただく良い機会になりました。

当日は体力測定ブースを出していたんですが、なんの会社なの?とご質問をいただくことも多かったです。2024年は応援に来られた方だけでも27万人でしたからね。テレビ中継もあるので、PR効果は大きいと感じました。社内ではうちわを作ったり、PR効果は大きいと感じました。社内ではうちわを作ったり、ランナーとして参加する社員が何名もいたりして盛り上がりました。次回は給水所や、子どもと一緒に応援できるスペースを作るとか、ボランティアさんに記念品を渡すのも良いですし、アイデアが尽きません。今から次の大会が楽しみです。

05 ミズノ株式会社

ランナー目線で作った オリジナルTシャツが大好評!



弊社では、前大会に続き参加賞のTシャツを作成いたしました。長年スポーツウェアの商品開発を行ってきたミズノのノウハウを活かし、素材はもちろん、パターンやデザインなど、ランナー目線で徹底的にこだわりました。当日、たくさんの参加者が着用されていたのを目にし、大変嬉しかったです。着用率も高く、評判も良かったので、スポーツメーカーとして誇りとやりがいを感じました。普段から着ていただければ大会のPRにもなりますし、大変意義のある協賛になりました。



ボランティアとして参加することで、 社員のコミュニケーションが円滑に。

今大会も例年通り、社員がボランティアスタッフとして参加しました。参加するにあたり、大会前からさまざまな取組を行いました。たとえば、当日の動きをわかりやすく工夫して伝えたり、経験者の社員が初参加の社員をサポートする体制を整えたり。その結果、社員同士のコミュニケーションが活発になり、普段の業務においても良い影響がありました。今後は、大会運営に直接携わることで得た知見を、他のボランティア団体や次の大会のスタッフと共有できる機会を作れたらいいと思います。



06 日本製鉄株式会社

